

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 擦文文化の成立とその展開                                                                                                                                                                                                      |
| Sub Title        | The formation and development of the Satsumon culture                                                                                                                                                             |
| Author           | 高杉, 博章(Takasugi, Hiroaki)                                                                                                                                                                                         |
| Publisher        | 三田史学会                                                                                                                                                                                                             |
| Publication year | 1975                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 史学 (The historical science). Vol.47, No.1/2 (1975. 12) ,p.99- 131                                                                                                                                                 |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 論文                                                                                                                                                                                                                |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19751200-0099">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19751200-0099</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 擦文文化の成立とその展開

高 杉 博 章

## 目 次

- I 擦文文化の実態
- II 本州文化の波及と続縄文文化の変容
- III 擦文文化の構成
- IV アイヌ民族文化の展開

## I 擦文文化の実態

北海道において、土器を有する最後の文化である擦文文化は、少なくとも時間的には直接続縄文文化に後続し、そして、いわゆるアイヌ文化に先行するものと理解してよいであろう。擦文文化の分布は、『知床半島を除く北海道一円と津軽、下北両半島』（石附一九六八、三四頁）とされているが、その発生に関しては従来ふたつの見解があり、それ

擦文文化の成立とその展開

は、『続縄文式土器文化と、土師器を伴う本州文化との強烈な文化接触の結果生れたものである』（菊池一九七〇、一九頁）とも、あるいは、『土師器を伴う文化を基盤とし、直系的に連続するものである』（石附一九六八、二五四頁）とも表現されている。両者は、擦文文化の形成にいわゆる本州文化が深く関与していたという基本的見解においては一致しており、それは今日大方の認めているところでもある。

だが、そのふたつの見解のニュアンスには、軽視し難い重要な問題が内在されていると考えられるのである。北海道という地理的にも本州とは一線を画し得る地域において、独自の文化圏を形成した擦文文化の性格を探索してゆ

くことによって、その意義は明らかとなつてこよう。擦文文化展開の様相は、極めて複雑であつたと思われる。

擦文文化の内容については、はやく一九三〇年代から認識され始めていた。河野広道が、『擦文土器群』（河野一九三三）という表現によつて、それが北海道における金属器を用いた文化を代表するものであり、本州の土師器・須恵器を用いた文化に相当するものであると内容付けたという点は、評価されてよい。そしてその生業に関しては、北海道西南部では原始的農耕の存在が知られるが、北部では狩猟・漁撈に依存した採集経済の段階にあつたとされる（河野・名取一九三八、河野一九四九、一九五五）。

擦文文化の内容が明確化されてゆく過程で、その研究も新たな展開をみる。桜井清彦は、東北地方北部の土師器の編年を行ない、それを二型式に大別した（桜井一九五八C）。そして、擦文文化のメルクマールとされる擦文式土器が、東北地方南部の編年の栗圃式（氏家一九五七）に相当する北部の第一型式の土師器（以下土師器第一型式と略称）と密接な関連性を有することを指摘した（桜井一九六

二）。擦文式土器の成立年代に関しては、現在八世紀末から九世紀前半とする見解（石附一九六八）が有力である。また、擦文式土器を伴う竪穴住居跡に、―それは、本州におけるいわゆる土師器文化の住居跡と形態的に類似するものが多く、それに伴う土器のセットもほぼ土師器のセット関係を踏襲しながら成立してゆくが―造り付けのかまどが一般的に発見されることから、擦文文化における農耕の存在の重要性を指摘したことは（桜井一九五八a、一九六二）、注目に値する。しかしながら、擦文文化の実態にはなお曖昧さが残されている。擦文文化の性格は、その系譜関係、分布状態及び展開過程の分析、検討によつて、さらに明らかにされるべき問題が多いと言える。

## Ⅱ 本州文化の波及と続縄文文化の変容

北海道在来の続縄文文化は、『金属器の存在に伴う石器の変化または減少、土器形態の簡略化』（森田一九六七、三九頁）がみられるとされる点、そしてまた、縄文文化以来の経済的基盤に依存していたという点等において特徴的

である。それに対して擦文文化は、金属器の普及によって縄文文化以来の伝統的な石器製作技術が失われ、巨視的には、言わば土器師文化の要素をそのまま導入するといった形で成立したものとされている。にもかかわらず擦文文化は、『すでに農耕をその内容の一部として持っていたことは、おそらく疑問の余地がないといってよい』が、『陸獣を主とし海獣を含む狩猟および鮭鱒を主体とする漁撈』に経済的基盤をおき、『その内容は、いわゆるアイヌ文化の場合にきわめて近いものであった』(大井一九七〇、五五―五六頁)とか、あるいはまた、『内陸河川における漁撈に多く依存し、また一部にはアワ・緑豆などの栽培も行なっていた』(岡田一九六〇、八六頁)停滞的な文化<sup>①</sup>という評価を受けてこなければならなかった。しかしながら、その論拠は、必ずしも説得性を有するものではなかった。

そこでまず、擦文文化の成立に多大な影響を及ぼしたとされるいわゆる本州文化の様相、特に東北地方北部の様相を検討してみる必要が生じてこよう。

東北地方の古墳文化は、その南部においては中期古墳以

降は確実な分布が知られ、畿内と同一であったとは言えないまでも、その様相は関東地方等と比較しても劣るものではなく、一般庶民の生活状態も全国のそれとほとんど差のないものであったとされている(伊東一九五七)。その実証性という点においては、さらに詳細な分析、検討の余地が残されているが、この古墳文化の伝播は、古墳や土器器の分布状態から宮城県北部の鳴瀬川・江合川の地区(高橋一九六三)、あるいは天平年間における律令政府による東北経営の諸柵を結ぶライン<sup>②</sup>(清水一九六一)ではほぼ一線を画されるという。そして、古墳時代後期における横穴古墳の分布もほぼこの地域までで、その北すなわち迫川以北は特殊な構造をもつ円墳が分布する。さらに、土師器第一型式以前の土師器の分布は極めて散見的で、古式土師器の存在は、稀に岩手県盛岡市永福寺山遺跡(吉田・武田一九七〇、岩手県一九七一)・秋田県由利郡西目村西目遺跡(奈良・豊島一九六七)・青森県青森市細越館址(県立青森高校資料)等で確認されているが、分布的に定着した存在とは言い難いのに対し、八世紀以降急激に土師器第一型式が普

及し、それを伴う竪穴住居が普遍的にみられるようになるという事象は、<sup>(3)</sup>軽視することができない。東北地方北部における農耕の普及が律令政府による東北経略以降の時期であることは、先学の間でもほぼ一致をみている。

こうした一連の様相が、北海道地方特に石狩低地帯を中心とする地域にまで波及していくという状況下で改めて問題となってくるのは、東北地方北部における律令政府と蝦夷との接触関係である。例えば、蝦夷の中心勢力であったとされる胆沢地方の蝦夷の反乱という事象に着目しても、そこには、強力な抵抗集団となって律令政府に対立し得たダイナミックスとして、いわゆる東日本土師器文化（＝農耕文化）の浸透という現象<sup>(4)</sup>を想定せずにはいられないのである。しかしながら、いかに八世紀前後のこうした背景に蝦夷という人間集団が介在されるとしても、文化の異同と種族のそれとはあくまで同一次元で取扱うべき問題ではなく、「蝦夷、アイヌ」といった人種問題にまで立入ることは当面の問題とするところではない。

ところで、東北地方北部には、後期古墳文化末期の群集

墳が分布する。石附喜三男は、岩手県においては一三例、秋田県においては二例、青森県においては一例が知られるとし、さらに、内部主体によって石室を有するものとそうでないものとの二形態に大別されると指摘した（石附一九六五a）。

#### 岩手県

- (1) 西磐井郡花泉町杉山
- (2) 水沢市見分森
- (3) 胆沢郡金ヶ崎町西根
- (4) 和賀郡江釣子村猫谷地
- (5) 同 八幡
- (6) 同 五条丸
- (7) 同 和賀町蝦夷塚
- (8) 花巻市熊堂
- (9) 紫波郡矢巾町狄森
- (10) 盛岡市蝦夷森
- (11) 岩手郡岩手町浮島
- (12) 同 西根町谷助平

(13) 二戸市金田一

秋田県

(14) 鹿角郡十和田町錦木

(15) 仙北郡六郷町六郷東根

青森県

(16) 八戸市鹿島沢

これらは、直径一〇m前後、高さ一m前後で、十数基、数十基の群集墳をなすとされる。出土遺物は、土師器・須恵器・和同開珎・蕨手刀・直刀・刀子・鉄鏃・鉄斧・鉄鋏・馬具・鍔帯金具・金環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス製小玉・琥珀玉等が確認されている。

一方北海道地方においては、石狩低地帯の江別市江別兵村（後藤一九三二）・同市町村農場（河野一九三四）・恵庭市茂漁（後藤・曾根原一九三四）に北海道式古墳と称される群集墳が存在することがはやくから知られている。近年に至って、これらは石附喜三男（一九六五a、一九六六、一九七二）、桜井清彦（一九六六）、伊藤玄三（一九六八、一九七〇）等によって、東北地方北部の末期古墳との関連

性が指摘されている。

北海道式古墳は、東北地方北部の末期古墳と比較して、規模は直径一〇m以下、高さ三〇～八〇cmとやや小さく、内部主体は地表面を掘り下げた長方形の土壇で、敷石等は認められていないが、ほぼ類似形態をとっているとみなすことができる。また、出土遺物に関しても、土師器・須恵器・和同開珎・蕨手刀・直刀・刀子・鑷子・鉄鎌・袋柄鉄斧・環状装身具・鍔帯金具・砥石・勾玉等が確認され、類似性を呈している。その実年代に関しては、和同開珎・鍔帯金具といった年代性の高い遺物（伊藤一九六八、一九七〇）が出土していることから考えても、その下限は八世紀後半と考える<sup>(5)</sup>と思われる。

さて、この北海道式古墳が形成されたのとはほぼ併行する時期に、同じ石狩低地帯において続縄文文化の墓制の系統をひく土壇墓が存在していたことが知られている<sup>(6)</sup>。それは、現在のところ次の三遺跡があげられる。

(1) 千歳市ウサクマイ遺跡（菊池一九六四）

墓壇のプランは、隅丸方形のもの（二三〇×九〇cm前後）

と、楕円形のもの(一二〇×八〇cm前後)とがある。土師器第一型式に類似すると思われる甕形土器(1・4号墓壙)・坏形土器(7号墓壙)をはじめ、蕨手刀(7号墓壙)・

直刀(2号墓壙)・刀子(2・3・7号墓壙)等の鉄製品が出土しており、また、江別式土器終末期の系統をひくと思われる片口土器(5号墓壙)も出土している。

(2)余市郡余市町天内山遺跡(峰山・金子・松下・竹田一九七一)

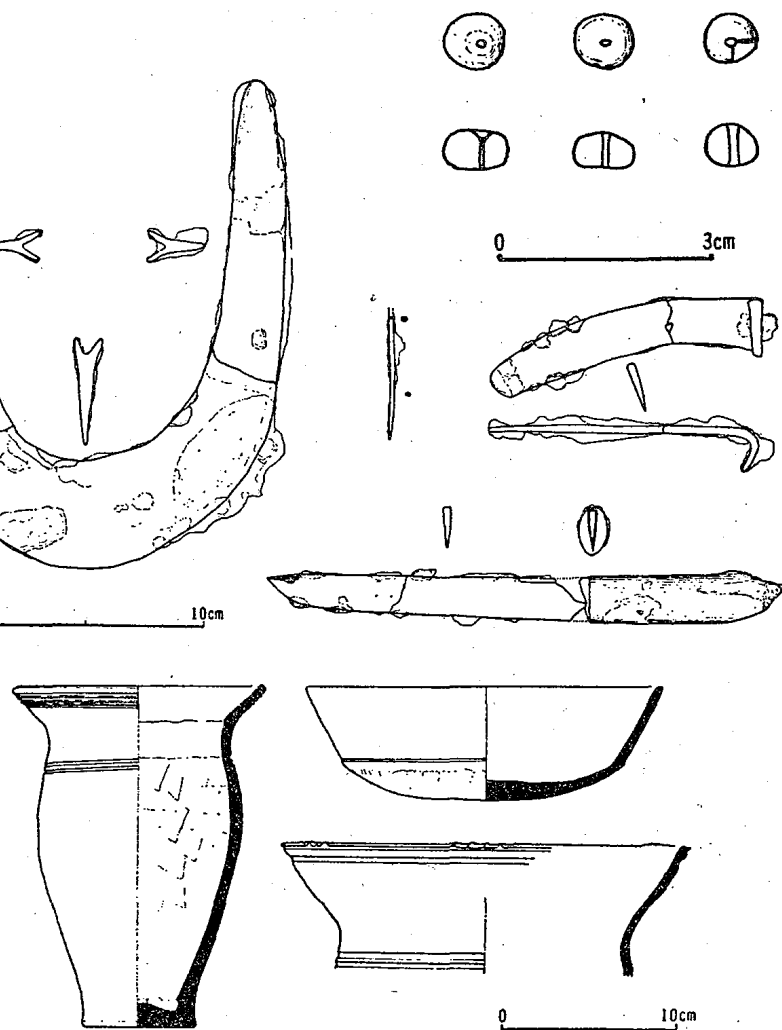


図1 恵庭市柏木川遺跡 Pit 77 出土遺物

墓壙のプランは、ほぼ楕円形(1号二七〇×一三〇cm・3号一八〇×一一〇cm・4号一二〇×九〇cm・5号一二五×七五cm・7号二一〇×一一〇cm・9号一五〇×一三〇cm・10号一六〇×九〇cm)を呈する。1号墳では土師器第一型式に類似する甕形土器・江別式土器終末期の系統をひく注口土器・刀子・鎌・鉄環・鉛?環が共伴し、3号墳では土師器第一型式の影響がみられる甕形土器・刀子が共伴している。7号墳では土師器第一型式の影響がみられる甕形土器・浅鉢形土器・刀子が共伴している。<sup>(8)</sup>

(3)恵庭市柏木川遺跡(高橋正編一九七一)  
墓壙(Pit 77)のプランは、ほぼ楕円形(一

三〇×八〇cm)を呈する。東大編年の『擦文第1』(駒井編一九六四)に属する甕形土器・土師器第一型式に類似する坏形土器・刀子・鎌・鍬・針・土玉が共伴している(図1参照)。

以上のように、本州の土師器文化の波及した―それは、単に文化伝播に基づく現象というだけでは理解し難いフアクターを含んでいるが―八世紀前後の北海道地方は、在来の伝統的文化と相俟って極めて複雑な様相を呈し始めてきているのである。

#### 註

(1) 岡田宏明の見解では、この停滞性は、擦文文化を母体とし、オホーツク文化の要素を取入れて成立したアイヌ文化にそのまゝ受継がれたものと解釈されるが、これは首肯できない。擦文文化における本州文化の関与の仕方とアイヌ文化におけるそれとは、別個の次元でとらるべき性質を内在しており、その歴史的背景を度外視しては考えられない面がある。言うまでもなく、両文化の比較・分析を行なうこと自体は基礎的作業であるが、単に現象面のみから両文化のアナロジーを説く従来のアプローチの方法には問題がある。

(2) 『続日本紀』天平九(七三七)年四月一四日の記事(東北

擦文文化の成立とその展開

大学一九六七)にみられる玉造柵・新田柵・牡鹿柵・色麻柵等の五柵を指すものと思われる。それはまた、石巻―色麻を結ぶラインであると考えられる。

(3) 東北地方北部における八世紀以前の物質文化の様相は、明らかでない。また、青森県地方において土師器第一型式が確実に遺構に伴った例は、現在のところ決して多くはない。末期古墳の分布状態と重ね合わせて考えると、その様相は、岩手県地方とはさらに一線が画されるのかもしれない。

(4) 蝦夷の反乱の中心となった『胆沢』の初見は、『続日本紀』宝亀七(七七六)年十一月二六日条の記事であるとされる。胆沢地方におけるこの時期の村落の在り方に関しては、関口明によって、文献では延暦八(七八九)年に律令政府軍により一四カ村、八〇〇余戸の村落が焼き払われた一例が、遺跡では金ヶ崎町西根堅穴住居跡群(草間一九五九、伊東・伊藤・草間他一九六八)の例が指摘されている(関口一九七二)。

(5) 伊藤玄三は、東北地方北部の末期古墳の実年代を七〇七年―七六〇年の間とし、北海道式古墳は八世紀末葉に下るものが少ないとしている。

(6) 最近、道東北部においても、十勝郡浦幌町十勝太若月遺跡で擦文文化初頭に位置付けられる土墳墓が確認されている(後藤秀一九七四、石橋・木村・後藤一九七四)。

(7) 略報によれば、1・4・9号墓墳でも鉄製品が副葬された痕跡が認められるとされる。

(8) 土器を伴わない4号墳より刀子・鉄鏃茎部、5号墳より刀子・鉄鏃、9号墳より刀子・鎌・斧、10号墳より大刀・刀子・斧が出土している。

### Ⅲ 擦文文化の構成

擦文文化の発生に関する先にも述べたふたつの見解は、そのメルクマールである擦文式土器の系譜関係を中心テーマとして先学によって論考が試みられてきた。それらの見解は細部においてニュアンスを異にしており、それぞれ慎重に検討されなければならない。そこでまず、擦文式土器の成立に関与した土器群について検討し、擦文文化の成立について考察を加えてゆくことにしよう。

東北地方北部に分布する土師器第一型式は、北海道に波及した。それと類似する土器が、石狩低地帯を中心に分布するのである。空知郡栗沢町由良(斎藤一九六三)、同郡奈井江町茶志内沼(野村一九六八)・夕張郡由仁町岩内(宇田川一九六九)・江別市町村農場(後藤一九三五)・札幌市北大構内(後藤一九三七)・同市白石神社(札幌市一九七

三)・恵庭市茂漁(後藤・曾根原一九三四)・古宇郡神恵内村観音洞窟(石附一九六八)・同郡泊村照岸洞窟(千代一九六五b)・岩内郡岩内町全修寺境内(石附一九六八)・函館市湯ノ川町(杉原・大塚編一九七四、市立函館博物館資料)等の諸遺跡があげられる。これらの中で、明確な伴出関係がとらえられるのは次の三遺跡である。

#### (1) 空知郡栗沢町由良遺跡

竪穴住居跡一基が調査されている。頸部から口縁部にかけて外反、口縁上部でやや内湾し、口縁部に三条の幅広い横走平行沈線文が施され、頸部に段を有する甕形土器、口縁部が外反し、頸部に段を有し、胴部より底部にかけてやや直線的にすばまり、底部のやや張り出す甕形土器・胴上部に最大径を有し、底部の張り出す壺形土器・胴部に沈線状の段を有し、丸底を呈する坏形土器直線的な器形を呈し、胴部に段を有する甕等計一四個体が共伴している(図2参照)。

#### (2) 夕張郡由仁町岩内遺跡

竪穴住居跡三基が確認され、そのうち二基が調査されて

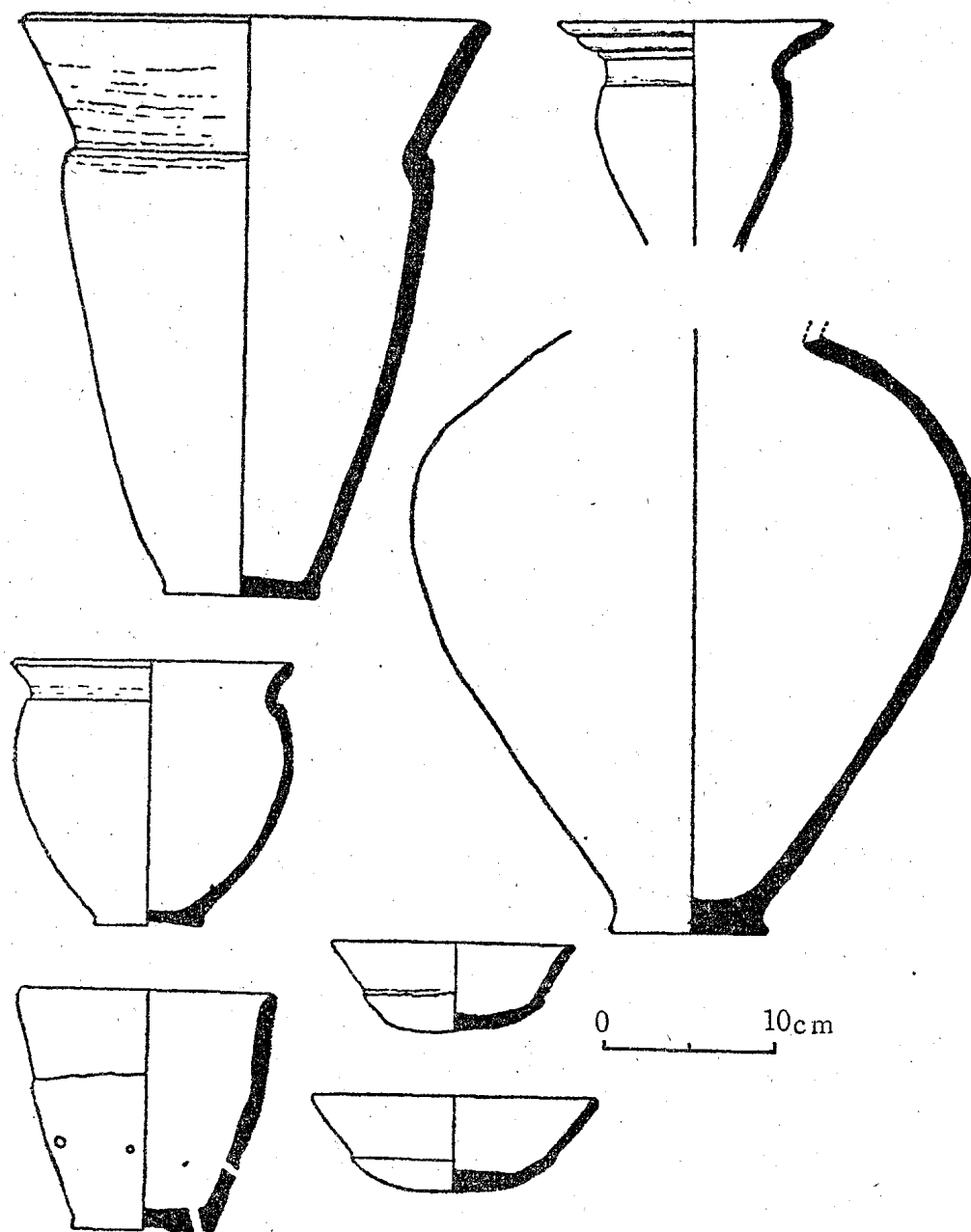


図2 北海道の土師器（空知郡栗沢町由良遺跡出土）

いる。1号住居跡では胴部ほぼ中央に段を有し、そこから底部にかけてすばまる小形の鉢形土器、胴下部に段を有し、やや平底化した坏形土器等計四個体が共伴し、2号住居跡では口縁部が外反し、頸部に二条の浅い沈線文が施され、胴部のあまり張らない甕形土器・胴下部に一条の沈線によって段が形成され、丸底を呈する坏形土器等計八個体が共伴している。また、1号住居跡外より頸部に一条の沈線によって段が形成され、胴部が張り、そのほぼ中央に最大径を有する壺形土器が出土している。

(3) 函館市湯ノ川町遺跡

堅穴住居跡二基が調査されている。口縁部が外反し、頸部に一条の沈線によって段が形成された甕形土器、胴部に一条の沈線によって段が形成され、丸底を呈する坏形土器等計九個体以上が共伴している。

土師器第一型式と比較して、これら北海道出土の土師器は、器形において若干の差異が認められ、器種のセットのうち高坏形が欠如している。また、湯ノ川遺跡例は、由良遺跡等の例よりも東北的であるとされ（斎藤一九六七、一九七二）、事実、北海道出土の土師器が言わば湯ノ川遺跡例を祖形とするといった形で地方化の傾向を強めたということは充分考え得るが、<sup>(1)</sup>それらは『編年の序列を与え得ないほど短期間に集中していた』（宇田川一九六九、一九頁）可能性が強いとみるのが妥当であろう。セットをなす器種の共通のモチーフとしては、土師器第一型式と同様甕形・壺形は頸部に、坏形は胴部にそれぞれ段を有するということが指摘できる。また、由良遺跡例には、口縁部に三条の横走平行沈線文が施された甕形土器がある。青森県北津軽郡市浦村中島遺跡（桜井一九五四）・秋田県由利郡西目村

西目遺跡（奈良・豊島一九六七、杉原・大塚編一九七四）等より出土している口縁部から頸部にかけて多条の横走平行沈線文が施された甕形土器のモチーフを踏襲したものと思われる（図3参照）。

次に問題となるものとして、いわゆる北大式と呼称される土器が存在する。これは、河野広道が『北大式Ⅱ後北E式』と呼称し、『縄文土器から擦文式への移行期の形式である。札幌市北海道大学校庭から出土したものを模式標本として北大式と名付けられたのである。<sup>(2)</sup>分布はほとんど全道におよんでいるが、西南部にはまれである』（河野一九五九、二九七頁）と説明したものである。

この北大式土器について松下亘は、江別式土器に関連があるものを一類、擦文式土器に関連があるものも二類としてグループピングし、これらの文様の共通のモチーフとして円形刺突文（いわゆる突瘤文<sup>(3)</sup>）が施されること、そしてその分布は全道的と言えないまでもかなり広範囲にわたっていること、さらに、続縄文文化と擦文文化との間に新しい文化を設定し得る可能性があることを指摘した（松下一九

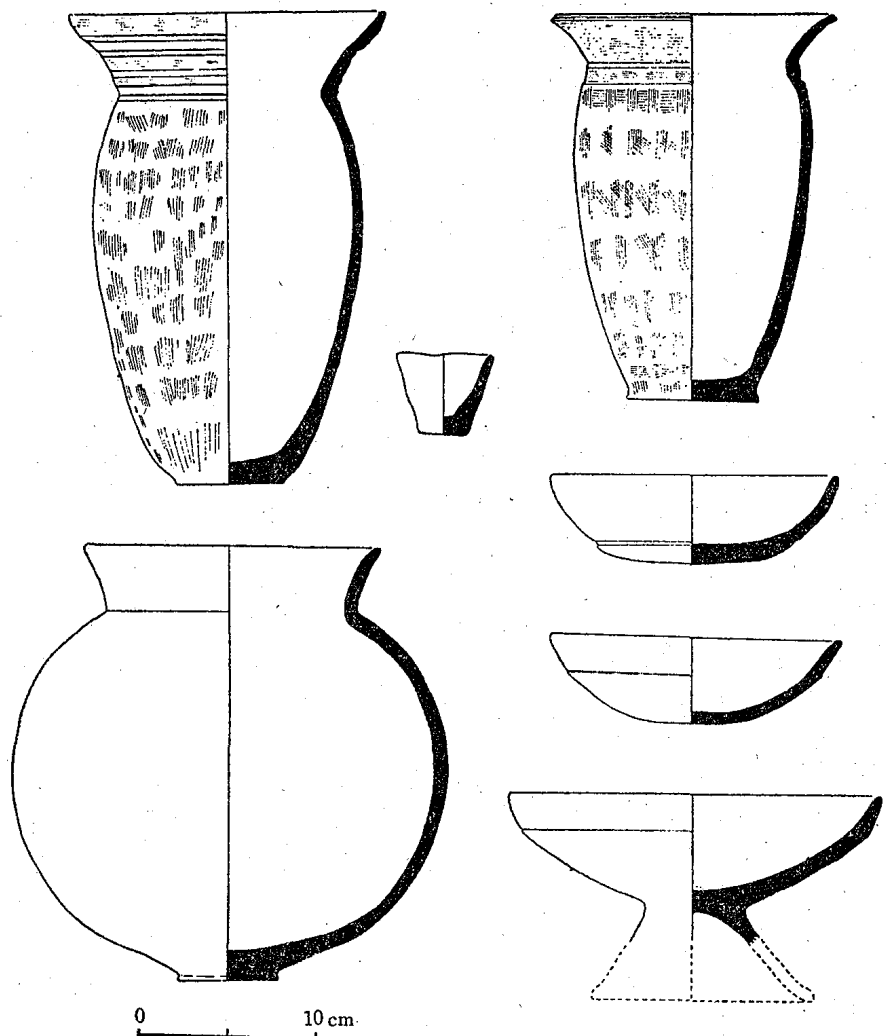


図3 東北地方北部の土師器第一型式  
(青森県北津軽郡市浦村中島遺跡出土)

六三、一九六五)。その編年的位置付けは、不明確だったのである。その後、千代肇は河野広道のいわゆる北大式土器を続縄文文化の所産であるとし(千代一九六五a)、森田知忠(一九六七)・斎藤傑(一九六七)等もそれらすべてを

している。浜益郡浜益村岡島洞窟(杉山一九三八)、勇払郡穂別町穂別中学校付近(河野本一九六五)・千歳市ウサクマイB(石附編一九七四)・札幌市北大構内(斎藤一九六七)・同市N162(札幌市一九七四b)・余市郡余市町フゴ

続縄文式土器として三型式にグループピングしているが、これらの見解は首肯し難い。松下亘が一類としたグループは、文様のモチーフとして円形刺突文の他平行細隆起線文・縄文が組み合わされ、縄文はほとんどの例がいわゆるRLの特殊縄文である。RLの特殊縄文は江別式土器にみられるモチーフであり、円形刺突文も江別式土器終末期から連続するモチーフであると指摘され(佐藤一九六四)、これらの土器群は江別式土器のグループに含まれている(佐藤一九七二、菊池一九七二)。

分布はほぼ北海道全域にわたるものと思われ、さらに本州にまでその分布域を延ば

ツペ洞窟（フゴツペ洞窟調査団編一九七〇）・古宇郡泊村  
 茶津洞窟（小樽市博物館編一九六二）・岩内郡共和村発足  
 岩陰<sup>(4)</sup>（小樽市博物館編一九六三）・渡島郡八雲町八雲駅鉄  
 道敷地（千代一九六五a）・常呂郡常呂町トコロチャシ（駒  
 井編一九六四）・斜里郡斜里町宇津内（米村・金盛一九七  
 三）・標津郡中標津町俣落（大沼一九六八）・釧路市細岡  
 （斎藤一九六七）・阿寒郡阿寒町殉公碑公園（岡崎・沢・富  
 水・藤村一九六三）・青森県下北郡東通村浜尻屋（江坂一  
 九六一）・宮城県玉造郡岩手山町木戸脇裏（佐藤信一九六  
 八）等の諸遺跡があげられる。

松下亘が二類としたグループには、LRの普通縄文を有し、器形において擦文式土器に類似したものが存在する。全例口縁部に円形刺突文が施されるが、文様はバラエティに富む。阿寒町シュンクシタカラ第Ⅲ群土器（岡崎・沢・富水・藤村一九六三、第10・12図）の一部のような沈線文で区画されたLRの磨消縄文帯が口縁部には横位に、その直下には鋸歯状に施される例、口縁部のLRの縄文ないしは無文地に集合条線文が鋸歯状ないしは横位に施される

例、口縁部にLRの縄文がやや粗雑に施される例、あるいは、余市町出土土器（松下一九六三、第1図）のような口縁部から胴中央部にかけて全面LRの縄文が施され、口縁部の円形刺突文直下及び胴中央部にそれぞれ二・三条単位の鋸歯状沈線文が施される例等がある。

この土器群の編年的位置付けについては、先にあげたシュンクシタカラ第Ⅲ群土器に関する佐藤達夫の見解（佐藤一九六四）が注目値する。すなわち、佐藤は『江別式が、その終末期に至るまで、特殊な技法によるRLの縄文を用いたのに対して、一変してLRの普通縄文を用いている。

この間に重大な変化があったとみななければならない』（九三頁）とし、さらに『アヨロの擦文土器<sup>(5)</sup>と時期的にほぼ併行し、この時期の擦文土器と交渉があったものと思われる。しかし、この一群の土器の基調をなすものは、かなり変化したとはいえないお続縄文的であるとみられよう。縄文は縄文土器以来の伝統であって、この型式はその意味では長い縄文の歴史の終末に位置することになる』（九五頁）と指摘した<sup>(6)</sup>。このグループは、土師器第一型式の明確な影響はみ

表1 擦文文化初頭の主要遺跡

- 註 1. 出土状態欄は住居跡を住、土墳墓を墓、古墳を墳、貝塚を貝、遺物包含層を包、採集を採、不明を?とし、遺構に伴わない出土には括弧を付してある。
2. 擦文○文様は図4参照。
3. 擦文第1の中には、口縁部破片で擦文式土器か土師器か峻別し得ないものもあるが、横走沈線文を有するというモチーフを基準にグルーピングしてある。

|    | 遺 跡 名         | 擦文0  |                 | 擦文第1 | 備 考                                                     |
|----|---------------|------|-----------------|------|---------------------------------------------------------|
|    |               | 出土状態 | 文様              | 出土状態 |                                                         |
| 1  | 浜益郡浜益村柏木地区秋田町 |      |                 | 採    | (大場・石川1961)                                             |
| 2  | 同郡同村浜益川上流左岸   |      |                 | 採    | (同上)                                                    |
| 3  | 同郡同村岡島洞窟      | 包    | f p             | 包    | 第5層より擦文0甕・擦文第1甕・土師器第一型式類似坏が出土(同上)                       |
| 4  | 厚田郡厚田町望来      | ?    | e h             |      | (北大植物園資料)                                               |
| 5  | 石狩郡当別町樺戸通り    | 採    | m               |      | (岩崎1965)                                                |
| 6  | 同郡同町青山        |      |                 | ?    | (石附1968)                                                |
| 7  | 空知郡栗沢町ソクタリ    | ?    | f               |      | 小形鉢形土器(野村1969, 写真47・48)                                 |
| 8  | 江別市飛鳥山        |      |                 | 住    | 擦文第1甕と胴部に段を有し平底化した坏・糸切底の須恵器坏が共伴(後藤1935)                 |
| 9  | 同市野幌町志文別      |      |                 | 住    | 擦文第1甕・胴上半部欠損の壺と胴部に段を有し平底化した坏が共伴(同上)                     |
| 10 | 札幌市北大第1農場     | ?    | c               |      | (市立旭川郷土博物館資料)                                           |
| 11 | 同市北大ポプラ並木     | ?    | f               |      | (同上)                                                    |
| 12 | 同市北大構内        | ?    | d               |      | (斎藤1967)                                                |
| 13 | 同市北大校庭        |      |                 | ?    | (市立昇川郷土博物館資料)                                           |
| 14 | 同市N154        |      |                 | 住    | (札幌市1974a)                                              |
| 15 | 同市N162        | 住墓包採 | o<br>j q<br>f j | 住    | 第1号住居跡より擦文○甕と擦文第1甕が共伴, 第1号ピットより擦文ojとqが共伴(札幌市1974b)      |
| 16 | 夕張郡由仁町中三川     | 採    | f               |      | (野村崇他1967)                                              |
| 17 | 同郡長沼町幌内       |      |                 | ?    | (石附1968)                                                |
| 18 | 恵庭市中島松        |      |                 | 住    | 擦文第1甕と土師器第一型式類似坏が共伴(大場・石川1966)                          |
| 19 | 同市公園          |      |                 | 住    | 擦文第1甕・高坏と土師器第一型式類似坏が共伴(同上)                              |
| 20 | 同市西島松南B       |      |                 | 住    | 第1号住居跡より擦文第1甕と土師器第一型式類似坏・高台付坏が共伴, 第2号より擦文第1甕・壺と坏が共伴(同上) |
| 21 | 同市茂漁          |      |                 | 墳採   | 第1号墳より擦文第1甕・片口・高坏・高台付坏が出土(後藤・曾根原1934), (大場・石川1966)      |

|    |                |            |                |     |                                                         |
|----|----------------|------------|----------------|-----|---------------------------------------------------------|
| 22 | 同市柏木川          |            |                | 墓   | Pit 77より擦文第1甕と土師器第一型式類似坏が共伴(高橋正編1971)                   |
| 23 | 千歳市蘭越          |            |                | 住   | 擦文第1甕・高台付坏・須恵器・擦文第2甕等が出土, 共伴関係は不明(大場・石川1967)            |
| 24 | 同市ママチ          |            |                | 住   | (石川・佐藤・金山1971)                                          |
| 25 | 同市ウサクマイB       | (住)        | f              | 住   | 第1号住居跡より擦文第1甕と糸切底の坏が共伴(石附編1974)                         |
| 26 | 余市郡余市町フゴッペ洞窟   | 包          | a f            |     | (フゴッペ遺跡調査団編1970)                                        |
| 27 | 同郡同町天内山        | 墓包         | k p q<br>g l p |     | 1号墓より擦文o甕qと注口が共伴, 7号墓より擦文o pとqが共伴(峰山・金子・松下・竹田1971)      |
| 28 | 岩内郡共和村発足岩陰     | 包          | a c<br>f i     |     | (小樽市博物館編1963)                                           |
| 29 | 寿都郡樽岸町朱太川左岸    | 採          | q              |     | (大場・棚瀬・金子1963)                                          |
| 30 | 同郡同町朱太川右岸      |            |                | 採   | (同上)                                                    |
| 31 | 白老郡白老町アヨロ      | 包          | e p r          | 包   | 第5層上半より擦文o甕・擦文第1甕と坏が出土(名取・峰山1962)                       |
| 32 | 虻田郡豊浦町小幌洞窟     | 包          | s              | 包   | A地点より擦文o甕と土師器第一型式類似坏が出土, B地点より擦文第1甕が出土(北大解剖教室1963)      |
| 33 | 室蘭市祝津          | 貝          | f              | 貝   | (大場1962)                                                |
| 34 | 同市舟見町          | 包          | m q            | 包   | 第3層より擦文o甕, 擦文第1甕と土師器第一型式類似坏が出土(同上)                      |
| 35 | 亀田郡銭亀沢村汐泊      | 採          | f q            |     | 同一地点より擦文o甕と土師器第一型式類似坏が採集(汐泊川遺跡調査団1965)                  |
| 36 | 松前郡福島町穂内館      |            |                | (壕) | (千代編1972)                                               |
| 37 | 同郡同町吉野         |            |                | 採   | (同上)                                                    |
| 38 | 旭川市近文町         |            |                | 採   | (斎藤1971)                                                |
| 39 | 浦河郡浦河町鵜苫川左岸    | 採          | f q            |     | (黒崎・中田・橋本1969)                                          |
| 40 | 同郡同町東栄         |            |                | ?   | (同上)                                                    |
| 41 | 常呂郡常呂町トコロチャン   | (住)<br>(壕) | a ? f          | (壕) | (駒井編1964)                                               |
| 42 | 同郡同町岐阜第二       | 住          | t              |     | (東京大学文学部1972)                                           |
| 43 | 同郡同町栄浦第二       |            |                | (住) | (同上)                                                    |
| 44 | 標津郡標津町俣落       | 採          | f              |     | (大沼1968)                                                |
| 45 | 川上郡弟子屈町下鑑別     | 採          | f              |     | (沢・宇田川・豊原1971)                                          |
| 46 | 同郡標茶町塘路        |            |                | ?   | (釧路市立郷土博物館資料)                                           |
| 47 | 阿寒郡阿寒町シュンクシタカラ | 包          | f              |     | B地点より擦文o甕と終末期続縄文式土器が出土(岡崎・沢・富永・藤村1963)                  |
| 48 | 同郡同町殉公碑公園      | 包          | a c            |     | (同上)                                                    |
| 49 | 十勝郡浦幌町十勝太若月    | 墓          | n              |     | Pit 67より擦文oと土師器第一型式類似土器が共伴(後藤1974, 石橋・木村・後藤1974, 浦幌町資料) |
| 50 | 青森県下北郡大間町割石    |            |                | 採   | (渡辺1966)                                                |
| 51 | 同県北津軽郡市浦村      |            |                | ?   | 細隆起線文状のやや幅広い横走平行沈線文が施された甕形土器。出土地詳細不明(十三小学校資料)           |

|    |                  |    |                                           |
|----|------------------|----|-------------------------------------------|
| 52 | 同県東津軽郡蟹田町<br>上小国 | 探  | (北林1971)                                  |
| 53 | 同県青森市奥内内真<br>部   | 探  | (同上)                                      |
| 54 | 同県同市造道沢田 A       | 住  | 擦文第1甕と土師器第一型式壺・坏, 第<br>2型式甕・坏が出土 (桜井1973) |
| 55 | 同 B              | 住? | (桜井・北林1969)                               |
| 56 | 同県同市築木館          | 探  | (葛西1971)                                  |
| 57 | 秋田県大館市館コ         | 住? | (奥山他1973)                                 |

られず、また遺構形態も明らかでない。

その分布は、松下亘が一類としたグループの分布状態とほぼ似通っており、石狩郡石狩町生振村(河野・藤村・畑・岩崎一九七三)・札幌市北大農場(千代一九六五a)・同市北大第一農場(札幌市一九七四b)・同市北大構内(斎藤一九六七)・同市N162・余市町・同町フゴッペ洞窟・網走市モヨロ貝塚(大場一九六一)・中標別町俣落・同町計根別(大沼一九六八)・阿寒町シユンクシタカラ・同町殉公碑公園・白糠郡音別町ノトロ岬(富水一九七〇)等の諸遺

跡があげられる。

松下亘が二類としたグループには、先にふれた続縄文式土器終末期の土器群の他に、土師器文化の影響を受けて続縄文文化が変容を開始した過渡的な時期に位置し、なお続縄文式的ではあるが縄文を失った土器群が存在する。27天内山遺跡(表1参照、以下略)1号墳では注口土器が共伴し、47シユンクシタカラ遺跡では同一地区より終末期の続縄文式土器が出土し、49十勝太若月遺跡Pit68では土師器第一型式類似の甕形土器と共伴し、15N162遺跡第1号住居跡では東大編年の擦文第1の甕形土器と共伴している。しかしながら、このグループの詳細な型式内容は明らかでなく、また細分される可能性があるとしても、現時点でとらえ得る存続期間は実質的時間は短期間であったと思われるが編年的にはかなりの幅を有し、続縄文文化から擦文文化への変換期を解決するものとしては長期にわたるおそれがあり、この間の文化変化のプロセスを充分に示すものとは言い難い点がある。その意味において、それらすべてを擦文式土器のグループに含めてしまうことには少なからず問題

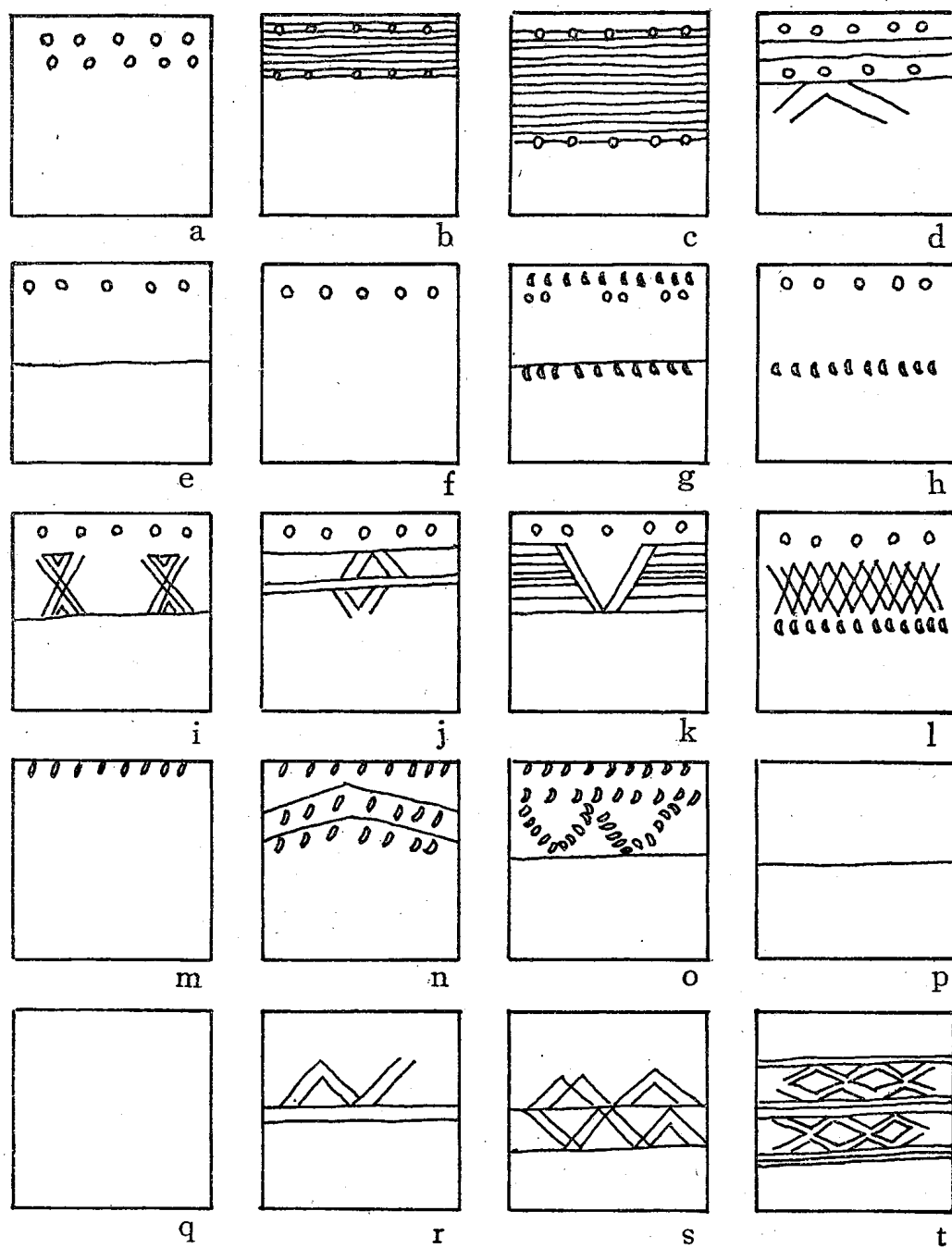


図4 擦文の文様構成図

(二一四) 一一四

が残されているが、それまでの続縄文式土器とは区別して考えなければならぬ要素を含んでいることは明らかである。すなわち、擦文式土器の最も古いステージに位置付けられる可能性の強いグループであり、東大編年に依拠して考えれば、大井晴男の『擦文0』(大井一九七〇)という呼称は有意義である。<sup>(8)</sup>このグループに含まれると思われるものを一括して取上げ、今後の課題としたい。

甕形土器の器形は、土師器第一型式のそれと類似するものが多くみられ、文様

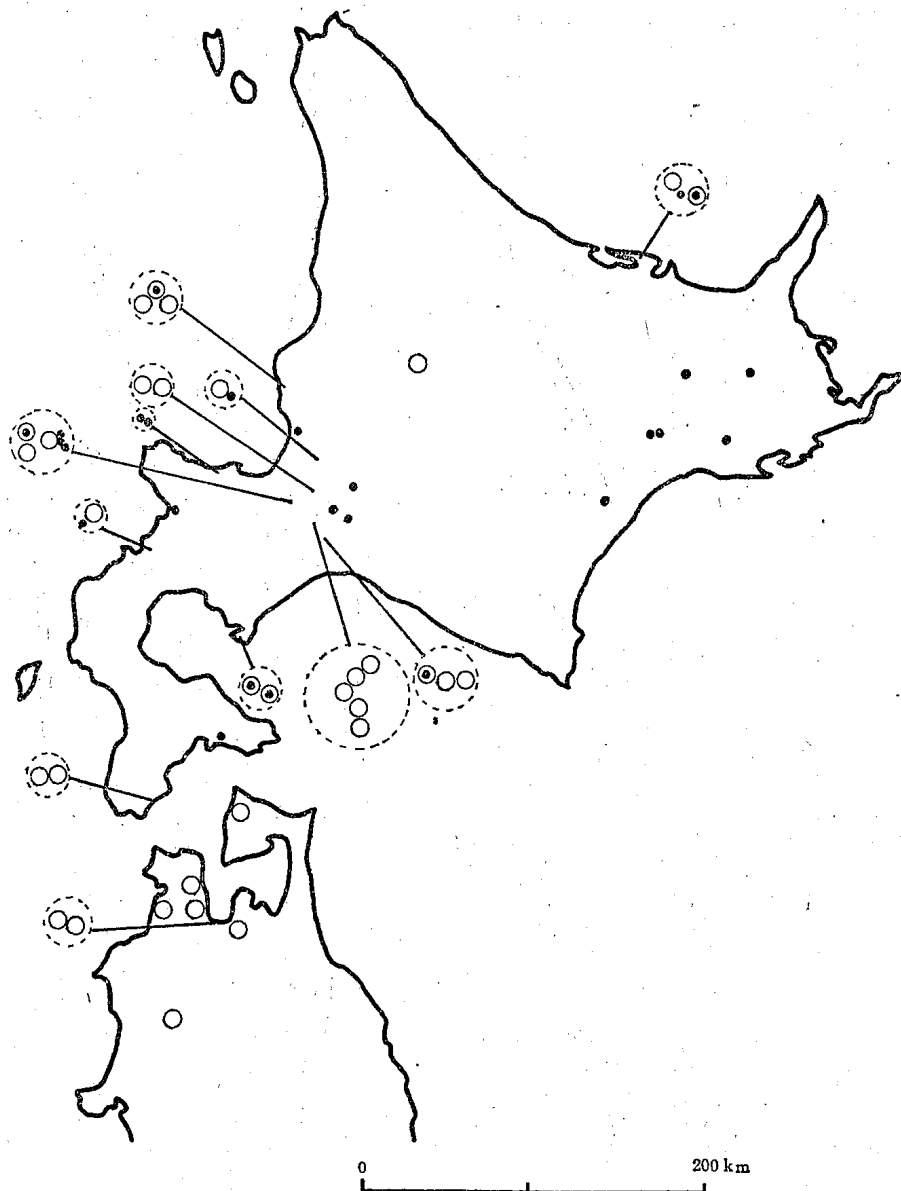


図5 擦文文化初頭の遺跡分布図 ●擦文0' ○擦文第1

は、口縁部ないしは、頸部胴上半部に掛けて施される。円形刺突文が施されるものと施されないものがあるが、他に連続刺突文、沈線文が組み合わさり、バラエティーに富む（図4参照）。続縄文式土器終末期にみられた縄文・集合条線文・沈線文等で描かれた鋸歯状文は、主に沈線文による鋸歯状文となり、さらに交叉沈線文が出現する。連続刺突文も、終始続縄文式土器に施されていた刺突文に由来するものであろう。また、土師器第一型式に特徴的にみられた多条の横走平行沈線文もみられる。これらの文様は、そのまま前半期の擦文式土器の文様のモチーフの中に受継がれているのである。

このグループに関しては、文化内

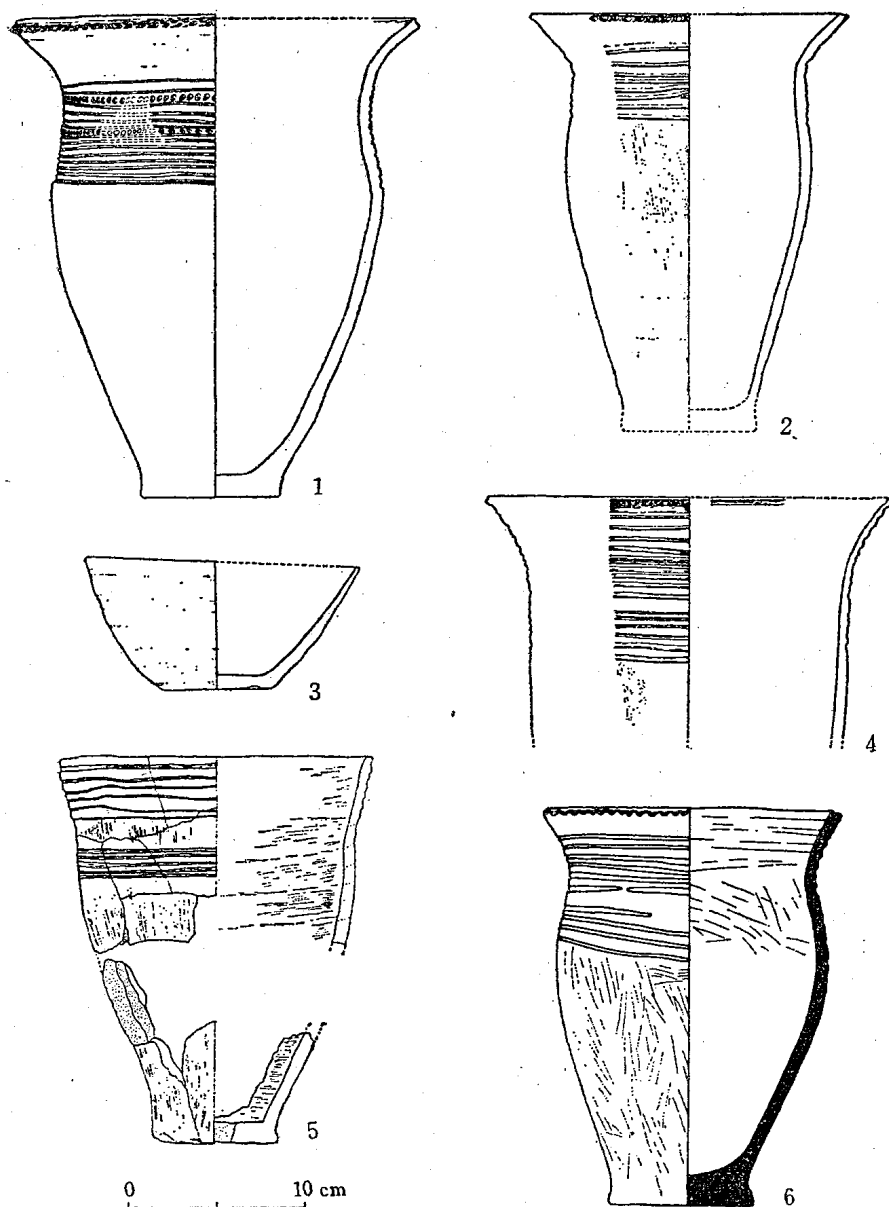


図6 擦文文化初頭（擦文第1）の土器

1・2千歳市ウサクマイB遺跡第4号住居跡出土，3・4同第1号住居跡出土（石附編1974），5常呂郡常呂町栄浦第二遺跡，11・12号竪穴表層出土（東京大学文学部1972），6川上郡標茶町塘路出土（大井1972）

容自体にもまだ不明確な点が多い。しかし、その分布は（図5参照）、道西南部に片寄りを呈しているようであり、相対的に道東北部では密度が薄いものと思われる。

一方、極めて土師器的な特徴を有し、初期の擦文式土器である（石附一九六八、菊池一九七〇）とも、あるいは北海道地方に波及した土師器第一型式が地方化した土師器であ

る(斎藤一九六七、佐藤一九七二)ともされている土器群が存在する。東大編年では、擦文第1と呼称され擦文文化初頭に位置付けられている(図6参照)。

甕形土器の器形は、土師器第一型式のそれと類似するが、頸部に形成されていた段を失い、文様は、口縁部ないしは頸部、胴上半部にかけて多条の横走平行沈線文が施され、さらに連続刺突文が施されたものもある。この横走平行沈線文は土師器第一型式のそれに由来するものであり、また擦文0にもみられるモチーフである。それは、擦文第2の時期まで文様の主要モチーフとなる。

坏形土器・須恵器の伴出関係が確認されているが、坏形土器は東北地方北部の土師器のそれに対応して変化がみられるようである。坏形土器を基準に擦文第1は次の三グループにグループピングし得よう。

a、ほぼ土師器第一型式のモチーフを踏襲した坏形土器を伴うグループ。3 岡島洞窟・18 中島松・19 公園・22 柏木川・24 ママチ・32 小幌洞窟・34 舟見町等の諸遺跡の例があげられよう。

b、胴部に段を残しているが、平底化した坏形土器を伴い、須恵器の伴出も確認されているグループ。8 飛鳥山・9 志文別等の諸遺跡の例があげられよう。

c、糸切底の坏形土器・土師器第二型式の高台付坏形土器類似の坏(浅鉢)形土器を伴い、須恵器の伴出も確認されているグループ。20 西島松南B・23 蘭越・25 ウサクマイB等の諸遺跡の例があげられよう。

分布は(図5参照)、擦文0よりもさらに片寄りを呈し、石狩低地帯を中心として道西南部で密度が濃く、東北地方北部にも分布する。道内陸部においては38 近文町遺跡一例が確認されているのみであり、道東北部では散見である。

擦文0は、北海道に波及した土師器第一型式と終末期の続縄文式土器との接触によって成立した。そして、49 十勝太若月遺跡における共伴例から由良遺跡等で出土している土師器と併行関係にあったということも充分首肯し得る。だが、土師器のセットである坏形土器を明確に伴出した例は確認されていない。墳墓は、27 天内山遺跡等で続縄文文化の系統をひく土墳墓が確認され、また擦文0を単独に伴

う竪穴住居跡は、現在42岐阜第二遺跡1号竪穴一例が確認されているのみであるが、それは方形のプランで炉を有するものであり、普遍的に、かまどを有する竪穴住居を使用した土師器文化の系列上にはない。しかしながら、擦文文化における竪穴住居跡には、炉だけのもの・炉とかまどを有するもの・かまどだけのものの三形態があり（山崎他一九六五）、その編年に関しては成功していないが、かまどをもたないものが少なからず存在することが指摘されているのであり（宇田川一九六六）、本例も擦文文化の所産としては決して異例なものではない。それらの諸要素は、直接的には続縄文文化に由来するものと考えられる。

それに対して擦文第1は、由良遺跡等で出土している土師器を母体として成立したものである。器種のセットは、道西南部においては明らかに土師器のそれを踏襲している。墳墓は、21茂漁遺跡で古墳群が確認され、また8飛鳥山・9志文別・15N162・18中島松・20西島松南B・24マチ・25ウサクマイB等の諸遺跡では、かまどを有する竪穴住居跡が確認されている。その主要な要素は、直接的に

は土師器文化に由来するものである。

擦文0及び擦文第1は、それぞれ土師器第一型式といずれかの部分において併行関係にあったと思われる。その関連は密接かつ複雑であり、土師器第一型式自体細分され得る可能性があると思われるが、<sup>(10)</sup>少なくとも擦文第1の上限は、いわゆる土師器第一型式の使用年代と極めて近接していたと考えることができよう。また、擦文0と擦文第1は異なる系譜関係にあったものと理解することによって、両者が時期的にオーバーラップする部分があったであろうことも首肯し得るのである。

擦文式土器は土師器を直接の母体とし、それが地方化して成立したものであり、一方いわゆる北大式土器も、その特徴は土師器に起源を有し、初期の擦文式土器（東大編年の擦文第1）と併存関係にあったと指摘しながらも、擦文式土器の文様は江別式土器、いわゆる北大式を通して保持された地方的停滞的な伝統によるものであって、そこには続縄文式土器に由来するモチーフ自体はまったく認められないと説く石附喜三男の見解（石附一九六五b、一九六八）

は必ずしも説得性を有するものではなかった。河野広道以来、近年に至って菊池徹夫等によって説かれている系統論は、その全面においてとは言い難いが、あながち不当なものではなかったことも首肯し得るのである。

本州の土師器文化は、北海道において続縄文文化とは峻別されなければならない要素と、土師器文化をそのままの形で受容しながらもそれとは峻別されなければならない要素とを成立せしめた。すでに続縄文文化と土師器文化は相互に関与しあい、アカルチュレーションを開始していたという点において、擦文<sup>o</sup>及び擦文第1に象徴される内容は、もはや続縄文文化とはいい得ず、土師器文化とも言い得ないのであり、あくまで擦文文化の一端として認識されなければならない。それは、言わば齊一的な内容を呈し、ほぼ北海道全域に浸透していったいわゆる擦文文化の胎動期であつたともみなすことができる。

先にふれたウサクマイ遺跡・天内山遺跡等の土墳墓より出土している金属器の中には、古墳群出土のそれと匹敵し得るものがあり、あるいは22柏木川遺跡における擦文第1

を伴う土墳墓の存在、15N遺跡162・49十勝太若月遺跡における共伴例等から類推しても、在来の伝統的文化の諸要素を保持していた人間集団と本州から波及した土師器文化の要素を受容した人間集団との接触の度合は極めて強く、しかも決して対立関係にはなかったものと思われる。『比較的スムーズにカマドを受容し、またある程度の農業を受容するためには受け取る側にそれだけの下地がなくてはならない。この下地は変容の両者がアイヌであつたという点に置きかえることができる』という桜井の指摘(桜井一九六二、二九〇頁)は、ここにおいて評価し得よう。

だが、道東北部の様相に着目しなければならない。擦文第1に属するデータは散見的で、遺構形態も、また土器のセツト関係も明らかではなく坏形土器の伴出例は確認されていない。しかしながら、道東北部において、擦文文化前半の展開に断絶を有していたということは理由のないことではなかったのであり、その分布状態も示唆しているように、北海道全域に土師器文化の要素が波及し、受容されるということとは決して容易なことではなかったと思われる。

擦文文化後半における道西南部から道東北部への擦文文化の爆発的とも言うべき展開の背景に、外的要因による人間集団の移動（大井一九七〇、一九七二）という事象を想定する前に、擦文文化の成立ということ自体その性格を正當に評価したならば、かかる内在的要因がまず考慮されなければならぬ。

道東北部の様相は、石器時代以来本州北端と密接な関連を保ち、この時期にあっても土師器文化の一端を定着させてひとつの文化圏を形成した道西南部とは峻別して考えられなければならないのであり、むしろこの地域のそうした在地文化は、いわゆる擦文文化の展開としては極めて妥当なものであったと理解すべきであろう。続縄文文化でも、土師器文化でもあり得ない擦文文化という独自の文化が北海道のほぼ全域に浸透してゆくそのプロセスは、漸進的であったと思われる。

註

- (1) 石附も同様の見解を示している（石附一九六八）。
- (2) タイプサイトの報告はなされていず、その実態は不明確な

ままであった。

- (3) 器面外側から施文具を突き、内側に瘤を作出する。中には瘤を作出しない例もあるが、同一モチーフとみなしてよいと思われる。この突瘤文は、松下亘によって樺太の十和田式土器との関連性が示唆されている。

- (4) 本例は、縄文にかわって集合条線文が施されているという点から考えれば、あるいは次の続縄文式土器終末期にグループングされるのかもしれない。

- (5) 報告者によって、擦文式土器A型とされたものである（名取・峰山一九六二）。

- (6) このグループに関する菊池徹夫の編年的位置付け（菊池一九七二）は、不明確である。

- (7) 本例は、ほぼ全面にRLの普通縄文が施されるという点では異例である。

- (8) ただし、大井晴男の擦文文化初頭に関する見解が、その全面において首肯し得るものとは考えていない。また、菊池徹夫の『プレ擦文』（菊池一九七〇、一九七二）という概念の意図は理解できるが、やや曖昧な点を残している。過渡的な一文化期を設定しようというのであろうか。

- (9) 19公園遺跡・22柏木川遺跡の甕形土器にも、口縁部上端に連続刺突文が施された例がある。同様のモチーフとして、指頭によって凹凸が施された例が6青山遺跡・17幌内遺跡例にあるとされる（石附一九六八）。

(10) 土師器の編年に関しては詳述し得ないが、土師器第一型式にあっても坏形土器の形態に若干の変化が認められる。それが細分の基準になるか否かは現時点では断定し得ないが、坏形土器の変化と対応して甕形土器にも形態的に若干変化があるように思われる。擦文第1aグループには土師器第一型式類似のやや平底化した坏形土器の共伴が、さらにCグループには糸切底の坏形土器の共伴が確認されている以上、擦文式土器の成立と密接な関連を有する東北地方北部の土師器の細分が試みられることは、有意義となつてこよう。

(11) この時期の東北地方北部からの文化伝播に基づくこうした金属器の普及に関しては、桜井清彦(一九六七)・菊池徹夫(一九七三)等によって論考が試みられている。

#### Ⅳ アイヌ民族文化の展開

東大編年の擦文第2に属する遺跡は、北海道のほぼ全域及び東北地方北部に一応の分布をみせる。道西南部においては、糸切底の坏形土器・高台付坏形土器及び須恵器等を伴うことが確認されており(図7参照)<sup>1)</sup>、擦文第1の時期との間に質的差異は認められない。しかしながら、この地域における擦文第2以降の時期のデータは、石附喜三男の指

摘通り減少の傾向を呈しており(石附一九六八)、擦文文化後半期に属するデータは、古宇郡神恵内村(小樽市博物館資料)・奥尻島青苗貝塚(千代一九五六、桜井一九五八b)、桧山郡江差町法華寺坂(大場・半沢・松崎・宮下一九五五)・同郡上ノ国町竹内屋敷(大場・松崎・渡辺一九六一)等の諸遺跡で確認されているが散見的である。

東北地方北端においても、擦文文化期に属する遺跡は青森県において現在約三〇カ所あげられるとされるが(桜井一九七一)、その分布は決して濃密であるとは言いがたい。

下北半島では、現在まで比較的多くの採集資料が集積されており、また津軽半島の蓬田村小館遺跡の竪穴住居跡群(桜井一九七一)の例は特異とも言えようが、それにしても竪穴住居跡に伴った例は断片的で、擦文第2に属する下北郡東通村稲崎遺跡(江坂一九五三)、あるいは擦文第3に属すると思われる北津軽郡相内村赤坂遺跡第1号住居跡(桜井一九五五)等の数例があげられるにすぎない。

道東北部における擦文第2に属する遺跡も散見的で、その前半にあって確実に竪穴住居跡に伴った例としては、現

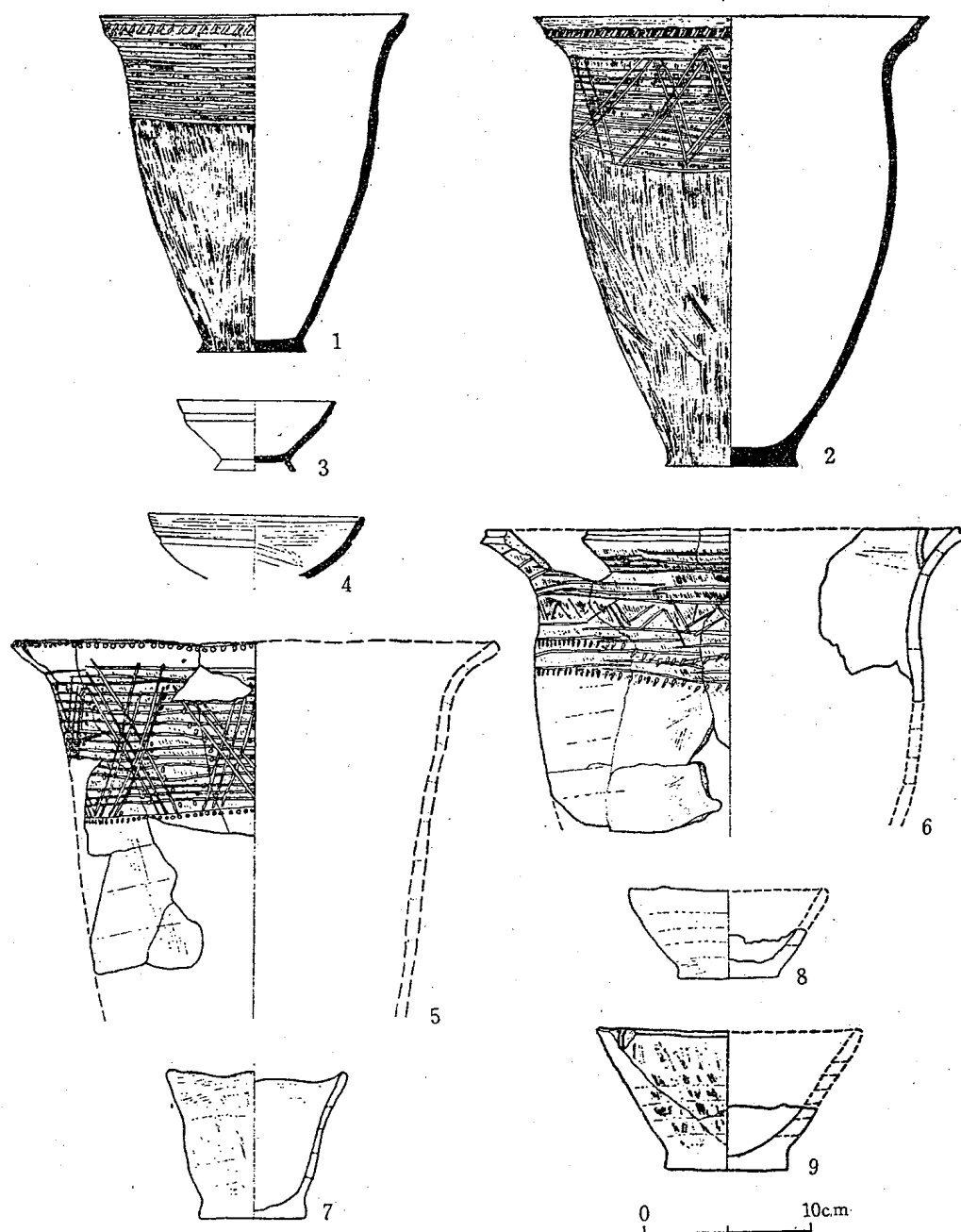


図7 擦文文化前半（擦文第2前半）の土器 1

1～4 岩内郡共和村発足岩陰遺跡出土（小樽市博物館編1963）

5～9 常呂郡常呂町栄浦第二遺跡7号竪穴表層出土（東京大学文学部1972）

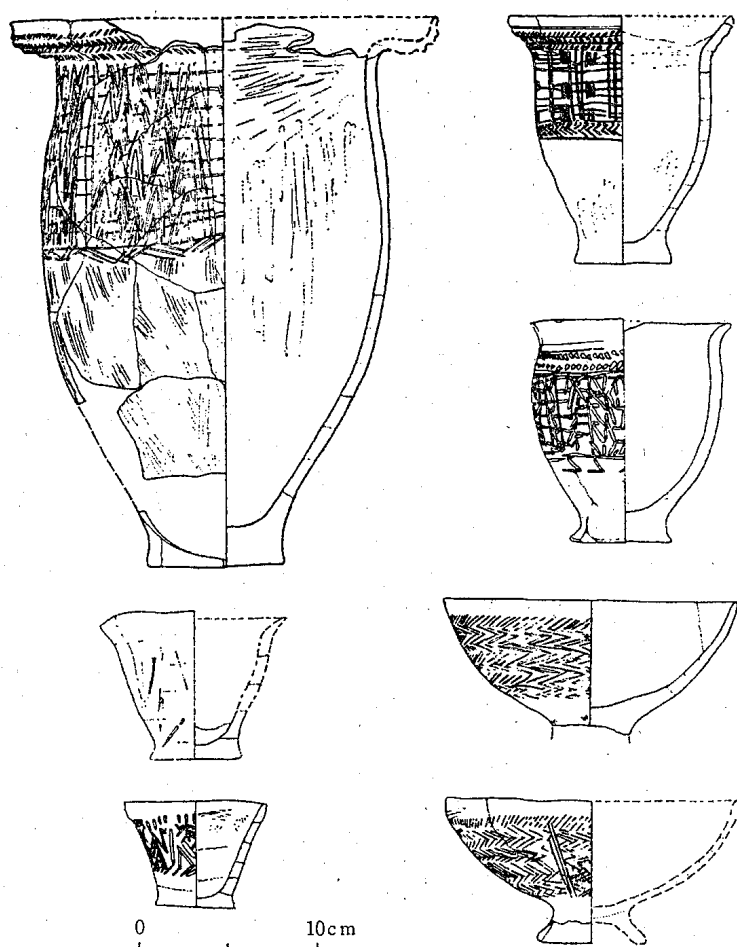


図8 擦文文化前半（擦文第2後半）の土器2  
（常呂郡常呂町岐阜第二遺跡8号竪穴出土  
東京大学文学部1972）

在のところ川上郡弟子屈町下鎢別遺跡（沢・宇田川・豊原一九七一）・釧路市緑ヶ丘遺跡（大井一九七二、釧路市立郷土博物館資料）等数例があげられるにすぎず定着的ではないが、常呂郡常呂町栄浦第二遺跡7号竪穴表層の出土例（図7参照）はセットとみなしてよく、この地域においても擦文式土器のセット内容が次第に明確になりつつあること

とを示唆している。そして、道東北部において坏形ないしは高坏形土器が擦文式土器のセットとして定着するのは、擦文第2後半（図8参照）以降と言えよう。

擦文文化の爆発的とも言うべき展開は、次の擦文第3の時期を待たなければならぬ。その発生時より漸進的に展開していった擦文文化は、この時期にあって最盛をみる。

周知の通り、道東北部における竪穴群はその大部分が擦文文化後半期すなわちこの擦文第3の時期ないしは第4の時期に属するものとされ、この時期には大規模な集落が形成されていたことが推定されている。その分布の濃密さは、道西南部における擦文第1及び第2に属する遺跡のそれを凌ぐものであり、限られた一地域すなわち道西南部からの大規模な人間集団の移動という現象を想定することは困難ですらある。両地域における擦文第1から第2の時期にかけての様相を比較して理解し得るように、その現象はむしろ拡散だった

のであり、さらに擦文第3の時期への展開だったのである。

こうした擦文文化の展開に付随する内在的要因は、おそらくは生活形態の変化にあったものと思われる。従来擦文文化における経済的基盤は、狩猟・漁撈を主体とする生産活動に多くを依存するものとされてきた。しかしながら、その内容を積極的に類推し得るデータは決して多いとは言えない。また、アイヌ文化における生産活動との関連性が指摘されながらも、それはネガティブなアナロジーが説かれるにとどまっており、擦文文化期の遺跡が漁撈に適する内陸河川一帯に立地すると指摘されながらも、遺跡の分布状態・立地条件・集落構成等に関する実証的検討はほとんどなされていないと言っても過言ではない。その実質的内容は、不明確だったのである。

擦文文化における生産活動の様相を類推していく上で重要なことは、単に狩猟・漁撈にウェイトがおかれていたということを強調する点にあるのではなく、それが農耕といかなる有機的関連性を持していたのかという点にある。も

し経済的基盤の一端を担ったと思われる農耕が―それは、ヒエ・アワ等の穀物の自家栽培の問題なのであるが―ネガティブにしかとらえられないのであれば、地域差の問題あるいは交易の問題等が考慮され得るであろう。

例えば、天塩郡豊富村豊富遺跡においては鋏・アワ・ソバ・緑豆の出土が(児玉・大場一九五九)、常呂郡佐呂町西高台遺跡においてはヒエの出土が(佐藤・其田一九六五)、根室市西月ヶ丘遺跡においてはモロコシの出土が(八幡・増田・岩崎編一九六六)、浦幌郡浦幌町十勝太若月遺跡においてはオオムギ・シソ・アワ・オニグルミの出土が(石橋・木村・後藤一九七四)、恵庭市柏木川遺跡においては鎌・鋏の出土が(高橋編一九七一)、釧路市緑ヶ岡STV遺跡においてはヒエ(?)・クルミ・貝類・エゾシカの出土が(沢編一九七二)それぞれ知られており、また稚内市声間大沼遺跡・同市恵北遺跡においては、オホーツク文化の影響が考慮され得るし、擦文文化の竪穴住居跡に伴ったと思われる多数の石器類はその伴出関係には疑問がもたれるが、貝類、鳥骨の出土が(大場・菅一九七二)、天塩郡天塩町天

塩川口遺跡においては貝類の出土が（大場・山崎一九七一）、野付郡別海町浜別海遺跡においては少数の石器・貝類・鳥骨・魚骨の出土が（北構・岩崎編一九七二）、旭川市神居古潭遺跡においては石鏃・ドングリの出土が（河野・佐藤・田沢他一九五九、佐藤忠一九六一）、浜益郡浜益村岡島洞窟においては骨角器・貝類・陸獣骨・海獣骨・魚骨の出土が（杉山一九三八、大場・石川一九六一）、古宇郡神恵内村観音洞窟においては石錘・骨角器等の出土が（千代一九六六五b）、室蘭市舟見町遺跡においては骨角器・貝類・シカの出土が（大場一九六二）、奥尻郡奥尻町青苗貝塚においては骨角器・貝類・海獣骨等の出土が（千代一九五六、桜井一九五八b）それぞれ知られており、その様相は決して一律ではあり得ない。擦文文化は、石器時代以来伝統的生業であった狩猟・漁撈及び採集等に加え、本州から伝播した農耕技術を導入することによって比較的単純な農耕を開始し、従来とは異なる生活形態を定着させ、独自の文化内容を形成していったものに違いない。

擦文文化と同様狩猟・漁撈に多くを依存していたと評価

されている近世のいわゆるアイヌ文化であっても、食料源としてのシカ・サケ・マス等の天然資源は、必ずしも安定的なものではなかった。アイヌの生存には、シカと共にその主要食料であったサケ・マスの豊凶が重大な影響を及ぼしたことが指摘されており（渡辺仁一九六四）、一四六八（応仁二）年の松前地方における風災による飢饉、一四七一（文明三）年の風災飢饉、あるいは一七二四（享保九）年の石狩地方におけるサケの遡行の減少による飢饉、一八〇六（文化三）年の十勝地方におけるシカの減少による飢饉等は、その捕獲・貯蔵技術の稚拙さにも起因していたことが指摘されている（高倉一九二九）。

また、農耕に関しては原始的農耕が存在していたことが知られているが、それは擦文文化に起源するものであるとされ（石附一九六七）、またアイヌの主要穀物であったとされるヒエ・アワが創世神話と結合しており、和人の穀物である米とは峻別されてもいることから、その栽培・収穫技術はかなり古くから存在していた可能性が強いということも指摘されているのである（八幡一九五六）。

擦文第4の時期にあつては、道東北部においても遺跡数は減少の傾向を呈している。そして、擦文文化の終焉に関する見解は区々であり、鎌倉時代初期、あるいは室町時代から江戸時代初期ともされている。従つて、擦文文化といわゆるアイヌ文化との間にあるヒアタスもいまだ完全に埋め尽くされているとはいひ難く、今後さらに検討の余地が残されていると言えよう。しかしながら、根室市西月ヶ丘遺跡第7号竪穴（八幡・増田・岩崎編一九六六）では擦文第4に伴つて内耳土器の出土が、釧路市STV遺跡8号住居跡（沢編一九七二）では擦文第4に伴つて漆器片の出土が、浦幌町十勝太若月遺跡第16号住居跡（石橋・木村・後藤一九七四）では擦文第4に伴つて椀ないしは坏と思われる木器の出土が、奥尻島青苗貝塚（桜井一九五八b）では擦文第4に伴つて内耳土器の出土がそれぞれ確認されているように、擦文文化後半期においてすでに新たな本州文化の波が及んできていたことが類推される。また、擦文文化における金属器に関しても、その自家生産を積極的に裏付けるデータが見出されていない現時点では、それはいずれ

かとの交易関係によつて求められなければならなかつたと考えなければならぬのである。

周知の通り、近世における和人とアイヌとの交渉は、決して対等な関係ではあり得なかつた。その交渉が深まるに従い、生活必需品以外の物資交換の為アイヌの労働状態は著しく変化し、さらには、それは生活必需品の交換にまで及び、その為自給自足経済は崩壊の度合を強めていったとされる（高倉一九二九、一九七二）。すなわち、かの八世紀前後の極めて重大な政治的情勢下にあつた東北地方北部から、北海道地方に波及して擦文文化を成立せしめた本州文化の波及の仕方及びその受容の在り方ということと、いわゆるアイヌ文化成立という時点における中・近世のそれとは、一連の時間的關係においてとらえられる文化伝播であるとはいへ、その間の歴史的状况の相違は明らかであり、この点が、文化の受容のなされ方にも大きく影響していたことは充分考えられる。

擦文文化からいわゆるアイヌ文化への展開のプロセスは、表現的には『抑圧された形でいわゆるアイヌ文化に押

しやられた』であり、『アイヌ民族文化の崩壊の一つの道程であつた』(大井一九七〇、註111)と言ひ得るものであつたに違ひない。

#### 註

(1) 千歳市千歳神社遺跡例は、糸切底の坏形土器・須恵器を伴い(河野一九三二)、発足岩陰遺跡例は、高台付坏形土器を伴っている。

(2) 大井晴男は、こうした展開の背景に本州から道西南部への新勢力の進出、それに伴う道東北部への擦文文化を形成した人間集団の大規模な移動という現象を想定し、オホーツク文化との関連の上から論考を試みている(大井一九七〇、一九七二)。

(3) 東大編年は、さらに細分されるものであろう。常呂地域における擦文式土器の変遷の様相(藤本一九七二)を参照しても理解し得るように、各地域におけるクロノロジーは充実されなければならぬ。擦文第3の時期をピークに、擦文文化は衰退の途を辿つてゆく。

#### 文献

石川徹・佐藤一夫・金山哲夫一九七一『ママチ遺跡』

石附喜三男一九六五a「東北地方北部における末期古墳の様相」

(『古代文化』14—2所収)

一九六五b「北海道における土師器の諸問題」(『先史学研究』5所収)

一九六六「北海道南部における8世紀前後の墳墓とその様相」(『古代学』12—4所収)

一九六七「アイヌ文化における古代日本の要素伝播の時期に関する一私見」(『古代文化』19—5所収)

一九六八「擦文式土器の初現的形態に関する研究」(『札幌大学一般教養部紀要』1所収)

一九七二「北海道における末期古墳と問題点」(『古代学研究』64所収)

石附喜三男編一九七四『北海道千歳市ウサクマイ遺跡—B地点発掘報告書—』

石橋次雄・木村方一・後藤秀彦一九七四『十勝太若月—第二次発掘調査—』

伊藤玄三一九六八「末期古墳の年代について」(『古代学』14—3・4所収)

一九七〇「所謂北海道式古墳の実年代」(『古代文化』22—2所収)

伊東信雄一九五七『宮城県古代史』(『宮城県史』1所収)

伊東信雄・伊藤玄三・草間俊一他一九六八「岩手県金ヶ崎町西根

古墳と住居址」

岩崎隆人一九六五「石狩郡当別町字樺戸通り出土の土器」(『釧路

古代文化』8所収)

岩手県文化財愛護協会一九七一「岩手の文化財宝」2

氏家和典一九五七「東北土師器の型式分類とその編年」(『歴史』

14所収)

宇田川洋一九六六「北海道に於ける擦文式土器時代の竪穴式住居

址」(『物質文化』8所収)

一九六九「由仁町岩内遺跡」(『北海道由仁町の先史遺

跡』所収)

江坂輝弥一九五三「青森県下北半島稲崎遺跡調査報告」(『古代』

12所収)

一九六一「先史時代における奥羽地方北部と北海道地方

の文化交流の研究」(『民族学研究』26—1所収)

大井晴男一九七〇「擦文文化とオホーツク文化の関係について」

(『北方文化研究』4所収)

一九七二「北海道東部における古式の擦文式土器につい

て」(『常呂』所収)

大沼忠春一九六八「北海道東部の北大式土器」(『若木考古』92所

収)

大場利夫一九六一「モヨロ貝塚出土の土器——所謂前北式・後北

式・擦文式土器——」(『北方文化研究報告』16所収)

一九六二「室蘭遺跡」

大場利夫・石川徹一九六一「浜益遺跡」

一九六六「恵庭遺跡」

一九六七「千歳遺跡」

大場利夫・菅正敏一九七二「稚内・宗谷の遺跡(続)」

大場利夫・棚瀬善一・金子有明一九六三「寿都遺跡」

大場利夫・半沢信一・松崎岩穂・宮下正司一九五五「桧山南部の

遺跡」

大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼庸一九六一「上ノ国遺跡——桧山郡上

ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書——」

大場利夫・山崎博信一九七一「天塩川口遺跡」

岡崎由夫・沢四郎・富水慶一・藤村久和一九六三「北海道阿寒町

の文化財」先史文化篇1

岡田宏明一九六〇「アイヌ文化史に関する一考察」(『民族学研究』

24—4所収)

奥山潤他一九七三「大館市片山館コ発掘調査報告書第1次」

小樽市博物館編一九六二「茶津洞窟遺跡」

一九六三「発足岩陰遺跡」

葛西励一九七一「青森市築木館遺跡出土の擦文土器について」

(『燃糸文』2所収)

菊池徹夫一九六四「千歳市ウサクマイ遺跡——略報——」(『北海道青

年人類科学研究会会誌』3所収)

一九七〇「擦文式土器の形態分類と編年についての一試

論」〔物質文化〕15所収)

一九七二「擦文式土器基本形態の形成」〔北海道考古学〕8所収)

一九七三「八世紀前後の北海道における金属製品について」〔北海道考古学〕9所収)

北構保男・岩崎卓也編一九七一「浜別海遺跡」

北林八洲晴一九七一「津軽半島における擦文土器の新資料」〔北海道考古学〕7所収)

草間俊一九五九「金ヶ崎町西根遺跡」

黒崎康雄・中田幹雄・橋本晋一九六九「浦河町の遺跡」

河野広道一九三二「胆振国千歳村火山灰下の竪穴遺跡」〔人類学雑誌〕47—5所収)

一九三三「擦文土器群」〔北海道原始文化聚英〕所収)

一九三四「北海道の古墳様墳墓について」〔考古学雑誌〕24—2所収)

一九四九「北海道の先史時代」〔北海道先史学十二講〕所収)

一九五五「斜里町史先史時代史」〔斜里町史〕所収)

一九五九「北海道の土器」〔郷土の科学〕23所収〔続北方文化論〕河野広道著作集Ⅱ一九七二所収)

河野広道・佐藤忠雄・田沢巖他一九五九「神居古潭遺跡発掘報告 昭和31年度・昭和33年度」

河野広道・名取武光一九三八「北海道の先史時代」〔人類学先史

擦文文化の成立とその展開

学講座〕10所収)

河野本道一九六五「穂別町の先史時代」〔穂別町史〕所収)

河野本道・藤村久和・畑宏明・岩崎隆人一九七三「石狩の先史時代」

児玉作左衛門・大場利夫一九五九「天塩国豊富遺跡の発掘について」〔北方文化研究報告〕14所収)

後藤寿一 一九三二「古墳の発掘について」〔蝦夷往来〕8所収)

一九三五「石狩国江別町の竪穴住居跡について」〔考古学雑誌〕25—2所収)

一九三七「札幌市及其付近の遺跡・遺物の二・三に就いて」〔考古学雑誌〕27—9所収)

後藤寿一・曾根原武保一九三四「胆振国千歳郡恵庭村の遺跡について」〔考古学雑誌〕24—2所収)

後藤秀彦一九七四「北海道十勝太若月遺跡の発掘調査」〔考古学ジャーナル〕92所収)

駒井和愛編一九六四「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」下斎藤傑一九六三「空知郡栗沢町由良出土の土器」〔北海道青年人類科学研究会会誌〕1所収)

一九六七「擦文文化初頭の問題」〔古代文化〕19—5所収)

一九七一「旭川市近文町発見の擦文式土器」〔市立旭川郷土博物館博物館だより〕4所収)

一九七二「北海道出土の土師器について」〔北海道青年人

類科学研究会誌 10 所収

桜井清彦 一九五四「青森県十三村中島発見の土師器」(『考古学雑誌』40—1 所収)

一九五五「青森県相内村赤坂遺跡について」(『古代』17 所収)

一九五八 a「オホーツク文化と擦文文化」(『考古学ノート』5 歴史時代所収)

一九五八 b「北海道奥尻島青苗貝塚について(第一次調査概報)」(『古代』27 所収)

一九五八 c「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」(『館址』所収)

一九六二「擦文文化に関する若干の問題」(『史観』65・66・67 所収)

一九六六「古墳文化の地域的特色北海道」(『日本の考古学』IV 古墳時代 上 所収)

一九六七「古代北海道における鉄器について」(『史観』75 所収)

一九七一「青森県小館遺跡の調査」(『考古学ジャーナル』62 所収)

一九七三「青森市沢田 A 遺跡の調査報告」(『北奥古代文化』5 所収)

桜井清彦・北林八洲晴 一九六九「青森市の擦文土器について」

(『北奥古代文化』2 所収)

札幌市教育委員会 一九七三「札幌市文化財調査報告書」I

一九七四 a「札幌市文化財調査報告書」IV

一九七四 b「札幌市文化財調査報告書」V

佐藤忠雄 一九六一「カムイコタン」(『民族学研究』26—1 所収)

佐藤忠雄・其由良雄 一九六五「先住民族の足跡」(『佐呂間町史』所収)

佐藤達夫 一九六四「モヨロ貝塚の縄文・続縄文及び擦文土器について」(『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下所収)

一九七二「擦紋土器の変遷について」(『常呂』所収)

佐藤信行 一九六八「宮城県岩手山町木戸脇裏遺跡—所謂北大式の南漸資料—」(『考古学雑誌』53—4 所収)

沢四郎編 一九七二「釧路市緑ヶ丘 STV 遺跡発掘調査報告—第一次調査・第二次調査—」(『釧路市立郷土博物館紀要』1 所収)

沢四郎・宇田川洋・豊原熙司 一九七一「弟子屈町下鑑別遺跡発掘報告」

汐泊川遺跡調査団 一九六五「汐泊川遺跡(汐泊川遺跡群第1地点)

の資料」(『Field』2 所収)

清水潤三 一九六一「東北地方における考古学の成果と蝦夷の種族論」(『史学』33—1 所収)

杉原莊介・大塚初重編 一九七四「土師式土器集成」本編 4

杉山寿栄男 一九三八「北海道石狩国浜益村岡島洞窟遺跡」(『人類学雑誌』53—7 所収)

関口明 一九七二「蝦夷の反乱とその歴史的意味」(『歴史学研究』

390 所収)

高倉新一郎一九二九「徳川時代に於ける蝦夷人口減少の事実及び其原因に対する一考察」(『農業経済研究』5—4 所収)

一九七二「新版アイヌ政策史」

高橋富雄一九六三「蝦夷」

高橋正勝編一九七一「柏木川 擦文時代・縄文時代晩期の墳墓と

縄文時代中期の住居址」

千代肇一九五六「北海道奥尻島遺跡調査概報」(『考古学雑誌』41

—2 所収)

一九六五a「北海道の続縄文文化と編年について」(『北海

道考古学』1 所収)

一九六五b「北海道積丹半島第一次調査報告」(『先史学研

究』5 所収)

東京大学文学部考古学研究室編一九七二「常呂」

東北大学東北文化研究会編一九六七「蝦夷史料」

富水慶一九七〇「白糠郡音別町の擦文文化遺跡調査概報」(『北

海道考古学』6 所収)

名取武光・峰山巖一九六二「アヨロ遺跡」(『北方文化研究報告』

17 所収)

奈良修介・豊島昂一九六七「秋田県の考古学」

野村崇一九六八「茶志内沼から出た土器」『空知地方史研究』2

野村崇編一九六九「空知の文化財」1 (埋蔵文化財編)

野村崇他一九六七「夕張川流域の先史遺跡」

擦文文化の成立とその展開

フゴッペ遺跡調査団編一九七〇「フゴッペ洞窟」

藤本強一九七二「常呂川下流域を中心とした擦文土器について」

(『常呂』所収)

北大解剖教室調査団一九六三「小幌洞窟遺跡」(『北方文化研究報

告』18 所収)

松下亘一九六三「いわゆる北大式土器についての一考察」(『北海

道地方史研究』46 所収)

一九六五「北海道の土器にみられる突瘤文について」(『物

質文化』5 所収)

峰山巖・金子浩昌・松下亘・竹田輝雄一九七一「天内山—続縄文・

擦文・アイヌ文化の遺跡—」

森田知忠一九六七「北海道の続縄文文化」『古代文化』19—2

八幡一郎一九五六「アイヌ文化における日本の要素」(『古代史談

話会編「蝦夷」所収)

八幡一郎他編一九六六「北海道根室の先史遺跡」

山崎博信他一九六五「開生遺跡」

吉田義昭・武田良夫一九六六「江別Ⅲ式土器の分布」(『奥羽史談』

55 所収)

米村哲英・金盛典夫一九七三「宇津内遺跡」

渡辺仁一九六四「アイヌの生態と本邦先史学の問題」(『人類学雑

誌』72—1 所収)

渡辺誠一九六六「下北半島割石遺跡採集の擦文土器について」

(『考古学雑誌』51—3 所収)

(一三二) 一三一